

第3回 AUI 研究会の記録

日時：2013年10月24日（木）18:00-20:00

会場：早稲田大学19号館713会議室

司会：松岡俊二（早稲田大学アジア太平洋研究科教授、AUI推進機構理事長）

報告：蟹江憲史（東京工業大学社会理工学研究科准教授）

テーマ：持続可能な開発目標（SDGs）とアジア：ポストMDGsとAUI構想

コメンテーター：草郷孝好（関西大学社会学部教授）

出席者数：23名

記録：荻野 亮（早稲田大学アジア太平洋研究科修士1年）

1. 概要

蟹江先生から、ポスト2015年のミレニアム開発目標（MDGs）と持続可能な開発目標（SDGs）のあり方に関する報告があった。具体的には、蟹江先生が代表をつとめる環境省環境問題総合研究推進費プロジェクトの紹介をしつつ、SDGsへの歴史的経緯や議論の現状と今後の課題について考察があった。その後、草郷先生より、SDGsの必要性や実務的な課題についてコメントがあり、参加者で総合討論を行った。

2. 報告

ポストMDGsとSDGsについて、今年度より環境省研究プロジェクトとして研究を行っている。また、国際科学会議（ICSU）が、国連環境計画（UNEP）、国連大学（UNU）、国際社会科学協議会（ISSC）およびベルモントフォーラム（BF）などとの連携で進めている統合的地球環境変化研究プログラムであるFuture Earth（FE）は、国際的な地球環境システム研究の再編と統合であり、ポストMDGsの議論とも大きく関係している。現在の世界の最重要課題は持続性であり、Rio+20においてもSDGsの策定が合意された。最終的には2014年の国連総会で決定見込みである。

MDGsは2015年を目標していたが、MDGsの反省と改善を踏まえて、SDGsを作成することになっている。MDGsの評価点としては、貧困レベルの改善、開発援助の増進、多様なステークホルダーの参加促進などがある。改善点としては、グローバルなベンチマークの設定、アクター間の連携や役割の強化、ユニバーサルな目標設定と個別目標の設定との関連の明確化、目標達成基準が指摘されている。

この間、地球環境研究が進展し、地球環境・地球容量の限界が明らかになり、SDGsの重要性が増したといえる。開発を進めるにあたり、地球の限界を考えざるをえなくなってきた。こうした代表的な研究としては、2009年のスウェーデンの研究者による地球容量の限界（Planetary Boundaries）がある。この研究は、地球環境システムを維持するための9つの重要分野を示している。そのうち、3分野（窒素循環、生物多様性、気候変動）ですでに地球容量の限界を超えている。生物多様性の減少ではさらなる種の絶滅の進行が予測され、気候変動問題の影響は平均気温の上昇として観測されている。こうした危機感から、FEはSDGsの必要性を強調している。開発を進めながら行動変化を促すのがSDGsの真の趣旨である。環境、社会、経済の3分野は、持続可能な開発を進める3本柱である。経済と社会は、地球の生命維持システムを無視しては成立しえない。

“Nature”で議論したSDGsでは、生活必需品、食料、水、エネルギー、生態系とガバナンスという6つの目標を立てた。今後の課題としては、多分野のガバナンスがあ

り、統合的な視点が必要になる。また、各課題間の因果関係も丁寧にみていく必要がある。

国連への貢献や環境省自体の目標として、SDGs の福島復興プロセスにおける活用を試みている。また、環境と開発に関わるギャップを埋めたいと考えている。我々の研究チームは多岐に渡り、国内で 40~50 名の研究者、海外からも約 20 人が関係している。

SDGs あるいはポスト MDGs は、主に開発と環境の問題である。例えば、貧困減少は資源配分との関連が大きい。こうした目標間の関係性を踏まえ、統合目標を考えている。具体的には、Planetary Well Being 目標、Human Well Being 目標といった統合目標を示す段階にきている。Resilience や Security の観点から目標を設定し、研究成果を出す予定である。

3. コメントおよび総合討論

MDGs の意義や課題にふれた上で、ポスト MDGs および SDGs について必要な点や実務的な意味を検討したい。MDGs のモニタリングは基本的に各国からのレポートイングなので、会議を重ねて蓄積できる点がユニークである。さらに、MDGs ができたことで途上国の現状を具体的に把握できたことは意義がある。

MDGs で達成できなかったことは、One Size Fits All という問題で、国家ごとの社会観や自然環境の相違を含めた制約条件を配慮せず、全ての国に対して同じ 8 つのゴールが 1990 年を基準年として達成目標を立てたことは課題として残る。MDGs には明確な統合型の目標値はない。ある意味、貧困削減目標＝NO.1 というものが現在も比較的持続している。8 つの目標の中でどれが優先かという問題は目標設定時の重要な要素ではないので、目標の設定自体が MDGs の課題であった。また、MDGs に取り組むと総合的な開発が進む反面、地域社会の固有の課題は取り残されがちである。これらを考慮しないと、ポスト MDGs や SDGs には行けないのではないか。

ポスト MDGs と SDGs との統合は大切だが、根本的な課題がある。都市人口の増加と GDP 増加の要因は、化石燃料の消費があったからである。現行の開発モデルの問題点を適切に考察できるのが重要である。開発の現場からみると、well being の重視がはっきりと示されるようになった。ブータンのような Gross National Happiness (GNH) を皆が学ぼうとしている。GNH 指標と Planetary well being も考え方は非常に近い。Planetary well being は大変興味深く、Planetary well being の目標は制約条件なのか、適切な状態なのかどちらであるのかなどを議論すべきであろう。Planetary well being と Human well being の統合も大きな課題である。

ポスト MDGs の考察は有意義である反面、SDGs の作成にはテクニカルな問題が先行するため、フレームワークが複雑化し、実行が難しいのではないかと考えられる。さらに、統合型の目標設定では、国や政府が先頭に立つのではなく、企業の活動や個人の意識に結び付けるプロセスが重要ではないかと思われる。地域レベルの踏み込みも必要であろう。